



## パラサイエンティフィック

—原田三夫先生のこと—

西田光男\*

昨年6月13日、科学ジャーナリストの草分け的存在であった原田三夫先生が亡くなられた。

私の友人などに、原田先生のことを話しても、誰一人として先生のことを知っている者がいない。おそらく戦後生まれの若者の中には、原田先生のことを知っている人は少ないことと思う。そんなこともあって、私は先生に直接、間接にご指導いただいた数少ない戦後生まれの若者の一人であることを、ひそかに誇りに思っている。

小学校6年のときだったと思うが、私は兄の本棚に並んでいた「自然界の驚異」という本を

借りて、夢中で読んだことを覚えている。「自然界の驚異」は、私に初めて自然のダイナミックな美しさを教えてくれた記念すべき本であるが、実は、私はその時に初めて原田三夫先生に出会っていたのである。

先生は明治23年に名古屋に生まれ、愛知一中を経て、札幌農学校に入り、そこで有島武郎に師事されたということである。病気のために札幌農学校を中退されたが、病氣療養後、八高を経て、理科大学（東京大学理学部の前身）の植物学科へ進まれ、牧野富太郎に師事されたと聞いている。

理科大学を卒業された後、大正5年に府立一中（現在の日比谷高校）の教壇に立たれ、その傍ら、『子供と科学』（後に『少年科学』と改題）という少年のための科学雑誌を独力で刊行された。『子供と科学』は採算がとれずに、1



原田三夫先生によって創刊された「子供と科学」の創刊号。



日本宇宙飛行協会の年会で講演中の原田三夫先生。

\*西田光男 (Mitsuo NISHIDA), 東海大学出版会, 編集部, 自然科学編集, 日本宇宙飛行協会幹事, 原子力工学

年で廃刊に追い込まれてしまったということであるが、少年向けの科学雑誌としては、これが日本で最初の試みであったと思う。

大正6年には府立一中を退職され、先生はいよいよフリーの科学ジャーナリストへの道を歩み始めることになる。そして、『科学知識』、『科学画報』、『子供の科学』、『面白い理科』などの科学雑誌の創刊に寄与されたのである。

一方、先生は大正8年に処女著作「植物の生活現象」を著わされて以来、「山の科学」、「海の科学」、「星の科学」、「地震の科学」、「科学と発明」、「自然界の驚異」、「宇宙旅行」、「人工衛星」など、百数十冊に及ぶ科学啓蒙書を執筆された。

先生の手によるこれらの雑誌や著書は、いずれも、読者を引きつける生きいきとした文章によって、科学を万人に易しく分りやすく解説するという姿勢に貫かれている。

福沢諭吉は、自分の著書について、「是等の書は教育なき百姓町人に分るのみならず、山出の下女をして障子越に聞かしむるも、其何の書たるかを知る位にあらざれば余の本意に非ず」（『福沢諭吉全集』緒言より）と書いているが、原田先生の著書の中にも同様の姿勢が感じられ

るのである。

ところで、先生は昭和28年に日本宇宙旅行協会（現在、日本宇宙飛行協会と改名）を創立され、当時ではまだ夢物語のような「宇宙旅行」に関する科学知識を日本に初めて紹介された。宇宙旅行協会は、火星大接近の昭和31年に「火星の土地権利書」を発行してマスコミを騒がせ、一躍有名になったことがある。しかし、本来の目的は夢を売ることではなく、天体観測や研究会、講演会などを通して、宇宙科学と宇宙開発技術の啓蒙・普及をすることである。スプートニク1号が打ち上げられてから数年の間、協会の人工衛星観測網が活躍したことを記憶されている方もいるのではないだろうか。協会は現在も地道な活動を続けている。

先生は、昭和43年には、自然に恵まれた千葉県大原に「花星庵」を構えて、悠々自適の生活を送られることになったが、そこでも先生は筆を取り続け、『花星庵たより』という印刷物を親しい人たちに配布された。『花星庵たより』には、先生の近況や思い出話、科学解説、宗教論、そして各界各層の知友からの便りなどが編集されていた。不定期に送られてくるこの便りを楽しみにしていたのは、ひとり私だけではなかったことと思う。

晩年の先生は「科学と宗教は相反するものではない」との信念を持たれ、新しい宗教観の確立を目指して、もっぱら宗教の研究に没頭されておられた。

先生の宗教観は昭和50年に「科学に基づく現代の宗教」として結実した。先生はその後、「仏教の実と虚」、「キリスト教を審く」などの宗教書を自費出版されている。

晩年まで筆を握っておられた先生の情熱には、私たち若者以上の熱気が感じられ、私自身も大いに刺激されたのである。そして、先生が他界される2カ月前に届いた『花星庵たより』14号が、先生からの最後の便りとなったのである。

ところで、「科学と民衆の接点」と題して、昨年9月7日付の読売新聞夕刊に掲載された、中山茂氏の論文のなかに次のような文章があった。



先生からの最後の便りとなった「花星庵たより」14号。

「……科学技術の独走的発展によって、一般社会との間のギャップが拡大され、そこから生じるいろいろな危険な様相が意識されるようになって、ギャップを埋める努力が評価されるようになった。……科学を人民の手に取りもどすためには、一にパラサイエンティフィック（科

学周辺従事者）の活動いかにかかっている。」

私は、この論旨に諸手を挙げて賛成する。そして、戦前・戦後を通じて科学の普及・啓蒙に尽力され、87才の生涯を閉じた原田三夫先生こそ、偉大なパラサイエンティフィックであったと考えるのである。